

宇曾川地先における泥堆積状況調査

幡野 真隆・岡村 貴司

◆背景・目的

宇曾川河口周辺では代掻き濁水等による泥の堆積が懸念され、平成15年には宇曾川河口付近において堆積状況調査が行われた。そこで、今年度も平成15年度調査地点を含む水域で底質調査を行った。

◆成果の内容・特徴

- 調査は宇曾川河口を基点として沖合方向には300m毎、岸沿いには600m毎に地点を設定し、合計24地点で行った(図1)。なお、平成15年調査地点はD1～D4地点、およびA1～A4地点に相当する。各地点においてエクマンバージ採泥器を用いて採泥し、目視にて表層の外観を確認した後、表層1cmを分取し、灼熱減量(%)、酸揮発性硫化物濃度(AVS:mgS/g乾泥)、粒度を分析した。
- 調査の結果、最も岸に近いライン(A1～F1)は砂地であった。A2～F2ラインでは宇曾川河口付近のD2地点で灼熱減量、AVS、泥分率(粒径64 μ m以下の粒子の割合)で顕著に高い傾向が見られた。A3～F3ラインでも宇曾川河口に近い地点でAVSが高い傾向が見られた(図2)。
- 平成15年におこなった調査結果と比較すると、灼熱減量は沖合でやや高い傾向にあるが、AVSは同程度から低い数値を示していた。また、A地点とD地点の粒度分析の結果から、泥分率(粒径63 μ m以下の粒子の割合)はD2地点を除いて、横ばいないしは低い値を示していた。

◆成果の活用・留意点

- 宇曾川河口の底質環境は平成15年調査地点での比較では変化が見られなかったが、河口付近での泥の堆積傾向が見られたので、今後周辺の底質環境への影響を注視していく必要がある。

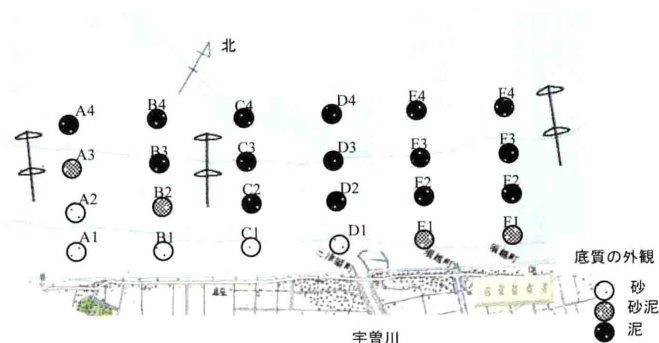


図1 調査地点と底質の外観

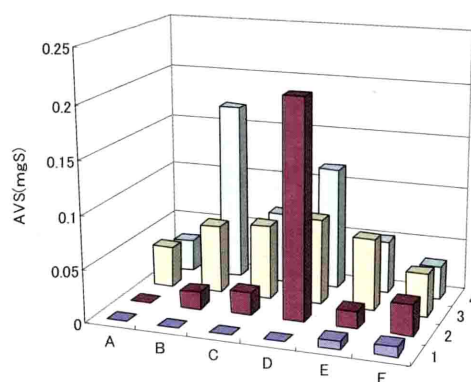


図2 AVS